

授業内外の学習を接続する絵本作成(IV)

—絵本作成の内容とスキルの類型—

野中 陽一郎¹⁾

1) 高知大学教育学部

Development of the picture book connecting in-class learning and out-of class learning (IV)

: The content of created picture books and the classification of skills

NONAKA Yoichiro¹⁾

1) Kochi University Education Department

要 約

本研究は、授業内外の学習を接続する絵本作成に基づく継続的な授業実践の報告である。保育者の専門性向上における養成段階の重要性と授業内外の学習を接続する一連の実践の展望と課題を示した。本年度の絵本に関する授業内外の実践を報告した。授業実践では、絵本作成の際により先輩の知見を活用出来、絵本の読み聞かせスキルを自己省察する際に各観点を自己評定と他者評定により整理した結果を活用出来る改善を行った。作成された絵本の題名と表紙そして内容に基づき、絵本の特徴を明確化した。絵本の読み聞かせスキルは、本年度の実践より見出された自己評定に基づく記述統計量だけでなく、一連の授業実践で読み聞かせ映像視聴より見出された自己評定結果をデータとして再整理統合し、クラスター分析によりスキルの類型を見出した。本実践やスキル類型の結果に基づき、今後の授業外学習での実践内容を改善した授業実践に関する考察を行った。

キーワード：絵本作成、読み聞かせ、授業実践、授業改善、授業外学習

1. 目的

幼児教育の重要性は、誰もが認めることであろう。幼児教育をより良いものにするを念頭におけば、幼児の発達と学びに大きな影響を及ぼす保育者の専門性向上を検討する必要がある。神長(2015)によれば、保育者の専門性は、子どもを理解する力、状況に応じて総合的に指導する力、保育を構想し実践する力と捉えられている。こうした保育者の専門性向上は、どのようになされているのだろうか。高濱(2000)は、保育者の経験年数に伴い、保育者の専門性が向上していくことを示している。実際、保育歴の長い保育者は保育の専門性が高く、幼児に対して寄り添い素晴らしい保育実践を展開出来ると想像しがちである。しかし、経験年数という側面だけに特化更には依存してよいのだろうか。実際、吉

村・吉岡・岩上・田代(1997)によれば、保育者の専門性は、経験年数にのみ依存し向上するものではなく、保育実践における振り返りを介して特定の実践に対する多角的視点の獲得を行い向上していくとされている。また、前田・加藤・坂田・橋本(2014)は、保育者が他の専門職と異質性を有することを指摘している。こうした中、野口(2013)は、保育者としての専門性向上が養成段階から始まっていることを示している。保育者としての専門性向上が養成段階から始まっていることに鑑みれば、実践力を有する保育者養成に真に資するカリキュラムや授業内での学習内容を検討することが普遍的な課題であることは言うまでもないだろう。

保育者養成も行う高等教育機関において、学びの質保証が叫ばれて久しい。川嶋(2008)は、日本の大学にお

ける学士課程教育の4年間で学生が獲得すべき知識や能力を明確化かつそれに基づき教育課程を編成する必要があること、この実現のために「教員中心」から「学生中心」へ、「教育中心」から「学習中心」へ、「個人の教育活動」から「組織的教育活動」へと3観点から大学教育を再構築する必要性を指摘している。学生中心の学びを展開するためには、学生自身の主体性を重視しつつもアミューズメント的な楽しさだけでなく、学びの楽しさに繋げる取り組みが必要となるだろう。こうした中、河井・溝上(2012)は、授業内外の学習、授業間の学習、異時点間の学習といった学習を架橋するラーニング・ブリッジングが深い学習アプローチと関連することを示している。この結果は、学習を架橋出来る大学生は、同様に授業での学習内容に対して意味理解を伴う深いアプローチが出来ていることを示唆するものといえよう。しかし、大学生の誰もが、学習を架橋出来ているとは限らない。このことは、大学教育に携わる人間や組織に対して、大学生が様々な学びを架橋できる仕組みを考案し支援する必要性を物語っていると考えられる。

様々な学びを架橋する仕組みは、多角的に捉える必要がある。しかし、授業担当者の視点で考えれば、授業内外の学習の架橋は、授業担当者の創意工夫により介入が比較的容易な点であるとも考えられる。実際、大学の授業の質を高める深い学習を促す授業手法として、蔣・溝上(2014)は大学生の授業外学習を考慮した上で授業内外の接続を促す実践を展開している。こうした実践は、学生自身が見出した授業外学習と異なる点に留意する必要があるものの学生自身に授業内外の学びを接続する機会を与えているともいえよう。授業外学習の活用は、授業時間とその前後に伴う予習及び復習を総括した学修時間数が定められた大学教育の単位取得制度に鑑みれば、妥当な活用方法ともいえるだろう。すなわち、大学教育に携わる者は、学習を架橋する一つ的手段として各授業の受講生に授業内外の学習も含めた授業を考案し提供する必要も考えられる。こうしたことを背景として、大学生が実際に受講する授業内学習だけでなく、授業外学習も踏まえた学びに着目した実践が展開されている。

野中(2017, 2019, 2020)は、保育士資格必須科目の中での授業外学習課題に絵本作成を位置づけ、授業内外の学習内容を接続する授業実践を継続的に展開している。野中(2017)は、絵本作成を授業外学習として位置づける意義を概説し、実践内容や学生が作成した絵本の特徴を提示するだけでなく、受講生自身の絵本作成で苦労した内容や読み聞かせ実践での課題を基礎的資料として示している。しかし、作成絵本の授業内学習における活用

方法の検討、読み聞かせスキルを省察出来る内容を加味した発展型の取り組みの必要性も考えられ、授業内学習に改善すべき課題が残されていた。野中(2019)は、野中(2017)を参考に授業外学習課題に絵本作成を位置づけ、授業内学習で絵本を活用し、受講生が自分自身の読み聞かせ実践に基づき容易に省察できる仕組みを取り入れた改良版の授業を展開している。この授業実践での省察過程は、自分自身の読み聞かせの実践場面の映像視聴に基づく自己評定や他者評定を踏まえたものとなっている。授業実践自体は改善が施されているが、野中(2019)の実践報告は、授業実践場面における映像視聴後に実施した観点別評定に自分の映像も他者の映像も読み聞かせ実践の同一指標として扱ったデータ分析を行い、受講生の読み聞かせスキルのタイプ別の傾向を示している。すなわち、当該研究は、自己評定および他者評定として本来区分すべきデータを一括した平均値を算出し、受講生の特徴を捉える観点別評定データに基づくクラスター分析の結果となっている。また、授業内学習の省察プロセスに自己評価と他者評価が暗黙に介在し展開された可能性が考えられ、省察により見出された自己課題に他者の読み聞かせの課題が含意されている課題も残されている。そのため、自分自身の読み聞かせ映像に基づき自己省察した結果を導くためには、自己評定と他者評定の違いを明確化する必要性が考えられる。こうした2回の授業実践と課題を踏まえ、野中(2020)は、野中(2017)の授業内での絵本活用と省察方法の課題、野中(2019)の提示した基礎的資料や省察の課題に鑑み、授業外学習課題に絵本作成を設定した授業実践および採取された基礎的資料の報告を行っている。当該報告は、作成された絵本の特徴、読み聞かせに関する各観点の自己評定と他者評定の枠組みに区分した実質評定結果である記述統計量、自分自身の読み聞かせの映像視聴より考えた受講生の自由記述内容を明確に記載している。この記述統計量は、自己評定と他者評定の違いを明確化しつつ個人が省察できる多角的な資源となるだろう。また、このような知見の積み重ねは、当該実践校に設けられたカリキュラムの及ぼす影響を加味する必要があるものの保育者養成に活用できる基礎的資料として位置づけることも可能である。しかし、自己省察という観点に鑑みれば、保育者志望の受講生が自己評定と他者評定の違いを明確化しつつ、自己の課題を省察する更なる仕組みを授業内での活動として設けることが重要になると考えられる。また、絵本作成においては、同一カリキュラムで学びを展開してきた受講生がどのような絵本を作成し、どのような特徴があるか等これまで蓄積されてきた資源を活用することも出

来るだろう。そして、読み聞かせスキルは、12の各観点を軸に検討し単一のスキルを個別に省察出来るようにしているが、個々の読み聞かせスキル間の受講生が捉える包含関係はどのようになっているかまでは明確化されていない。受講生が自分自身の絵本の読み聞かせの映像視聴を介して実施する自己評定より導き出された評定得点の活用は、単一のスキルの内容ではなく、受講生のレベルに基づくスキルの類型とそれぞれの特徴を検討することに寄与すると考えられる。このことが実現できれば、受講生のトレーニングすべきスキルの包括的な基礎的資料として活用出来るのではないだろうか。また、野中(2020)といった単年度の絵本の読み聞かせスキルに対する知見だけでなく、年度は異なるものの野中(2017, 2019)といった同一授業を受講した各受講生自身が自己評定として読み聞かせスキルをどう捉えているのかこれまで蓄積されてきたデータも存在している。そのため、当該データを統合し再分析することはスキルの類型を見出すことが出来るため、スキルの包含関係を可視化した基礎的資料を提供するという目的を果たすことが可能といえるだろう。

以上のことから、本研究の目的は、野中(2020)の授業実践上の課題を解消すべく、絵本作成する上での資源の提供、省察プロセスを改善した授業概要の報告を行う。また、当該授業で作成された絵本の特徴を示すだけでなく、当該年度の受講生の読み聞かせスキルに対する自己評定結果に野中(2019, 2020)の自己評定得点のデータを統合と再整理を行い、受講生自身が捉えた読み聞かせスキルの類型について探索的な報告を行う。こうした実践報告は、授業内外の学習を接続する今後の方策を検討する上で有効となりえるだろう。また、ミクロな視点ではあるが、鈴木(2014)の保育の質を高めるために必要とした中でも質を改善するためのシステム構築としての養成段階を再検討する資源と位置づけることが可能だとも考えられる。

2. 方法

1. 受講生

2019年度1学期開講の保育の心理学を受講した幼児教育コース所属2年生の8名であった。

2. 授業外学習課題として設定した絵本作成

授業外学習課題として設定した絵本作成は、作成材料を保育の心理学での授業外学習を課した野中(2017, 2019, 2020)と同様のワークシートによる「白無地絵本(A4判)」とすること、各ページの利用、対象幼児の年齢等は自由とした。作成する絵本のテーマや内容は、「幼児の

好奇心を育む絵本」としたが、先輩の作成した絵本や実際の読み聞かせの映像を通して考えたことを踏まえ、どういった絵本内容や読み聞かせをすれば幼児の好奇心が育まれるかを検討した上で作成するよう教示した。

3. 絵本に関する授業内学習

1回目の授業は、授業外学習として「絵本」を作成することを教示した。また、授業外学習の課題は、自分の好きな絵本を回想し、次回までに好きな絵本1冊の内容を調べて発表出来る準備をすることとした。2回目の授業の冒頭では、回想し調べてきた「好きな絵本」を題材に意見交換を行い、なぜその絵本が好きなのか、絵本の魅力を検討し幼児に向いている絵本はどのようなものか検討する活動を行った。3回目の授業では、これまで保育の心理学で作成された絵本や絵本の特徴、先輩の読み聞かせ実践の映像視聴を行い、考えたことの意味交換を行った。なお、希望者は授業後にいつでも別の映像視聴や絵本の検討も出来ることを提示し個々の学生のニーズに対応する処置をとった。4回目の授業以降は、授業の冒頭に毎回、受講生の1人が保育士役、他の受講生が幼児役を演じ、模擬場面において著者が選定した1冊の絵本の読み聞かせ活動を実施した。8回目の授業では、作成予定の絵本のねらいや構想をまずペアワークで意見交換を行い、その後全体の前で発表し、他者から意見をもらえる機会を設けた。12回目の授業では、作成絵本の特徴やねらい等を発表した上で、作成絵本の読み聞かせ実践を行った。個々の読み聞かせ実践後には、必ず別の受講生1名から肯定的なフィードバックを受けることが出来た。また、読み聞かせ実践後には各自の絵本の内容についてどのような改善を行えばより良いものになるか再検討する時間を設けた。13回目の授業では、12回目に実施した自分自身を含む総計8名の読み聞かせの録画映像を視聴することを求めた。また、視聴しながら野中(2019, 2020)と同様に設定した12観点の5段階評定シートに基づき、他者だけでなく自分自身の読み聞かせに関する評定を行い、当該結果を担当教員に提出を求めた。14回目の授業の冒頭では、各受講生に自分自身の自己評定の結果と他者からの評定結果の平均値を12観点ごとに整理したものを配付し、自分自身の捉え方と他者から捉えられた自分の読み聞かせに関する違いを踏まえながら個人で自分自身の読み聞かせの課題に関する検討を行ってもらった。その後、各グループ4名で読み聞かせ向上に関する意見交換を行った。

4. 絵本の読み聞かせスキルの自己評定結果の統合

本授業実践の中では、各受講生の読み聞かせに対して、12観点の読み聞かせスキルをそれぞれどの程度達成出

来ていたかの程度を評定させている。そのため、自分自身の読み聞かせに対する自己評定結果と他者の読み聞かせに対する他者評定結果に整理することが出来る。自己省察の意義に鑑み、本年度の実践により採取された受講生が自分自身の読み聞かせ映像視聴に基づき実施した8名分の自己評定の結果と野中（2019, 2020）で採取された21名分の自己評定の結果を統合した。その結果、総計29名分の自己評定結果を絵本の読み聞かせスキルの自己評定結果統合データとして整理できた。

3. 結果と考察

1. 作成された絵本の特徴

作成された絵本は、題名毎に「No1 いっしょにあそぼう」、「No2 もりのおしょくじかい」、「No3 だれかのおとしもの」、「No4 のんちゃんのさんぽ」、「No5 おべんとう」、「No6 1年生になったら」、「No7 ぼくはたまご」、「No8 おめでとうティくん」といった8冊であった。各絵本の表紙とあらすじは、Appendixに掲載した。

本実践の中で作成された絵本の内容は、全て物語絵本であると考えられるものの概ね3つのカテゴリーに整理することが出来た。1つ目のカテゴリーは、「No6」や「No7」及び「No8」のような環境移行や記念日及び生命の誕生といった発達上のライフイベントに関する事象を取り上げたものである。2つ目のカテゴリーは、「No2」や「No4」及び「No5」のように食の中でも直接・間接的に料理が出来るプロセスに関する事象を基軸にストーリーが構成されているものである。3つ目のカテゴリーは、「No1」や「No3」のような読み手と聞き手のやり取りの中で聞き手が何かを想像することを基軸にストーリーが構成されているものである。また、登場キャラクターは、「No6」以外は動物や食材など人間以外が描かれていたが、全て擬人化されていた。この傾向は、野中（2017, 2019, 2020）の一連の結果と同様のものであった。このキャラクターを擬人化する背景として、受講生が、幼児に対する絵本の読み聞かせを行う上で物語の内容理解を容易にする方略であると考えていることが伺えた。しかし、絵本の目的にもよるが、科学的知識や事実として動物などの生体上の面白さを伝達する際には、擬人化が果たして必要かどうか併せて検討する必要も考えねばならないだろう。

2. 自己評定に基づく読み聞かせスキルの類型

統合データより各受講生による12観点の読み聞かせスキルの達成度を算出し、各読み聞かせスキルの達成度に基づき読み聞かせスキル間のユークリッド距離の平方を求め、クラスター分析(Ward法)により読み聞かせスキ

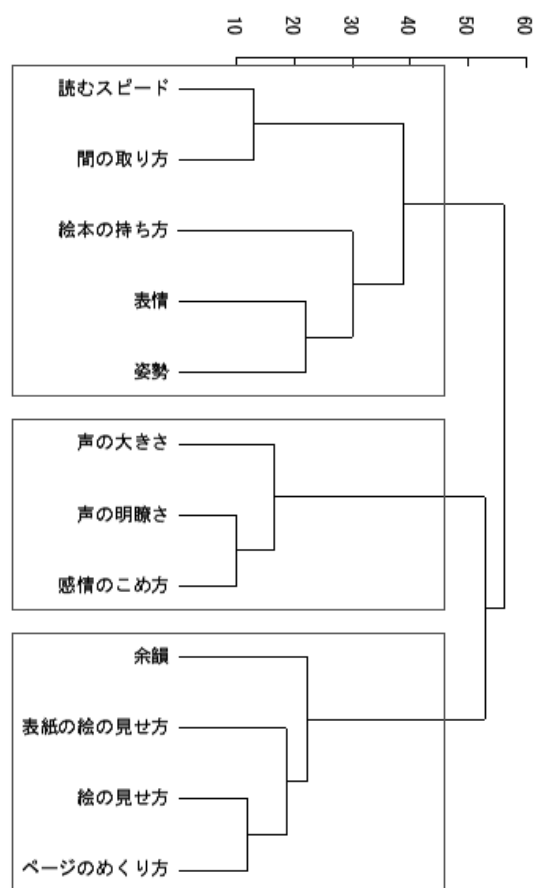


Figure 1 読み聞かせスキルの自己評定に基づく類型化

ルの分類を行った(Cophenetic $r=0.58$)。その結果、解釈のしやすさから3クラスター解を採用した(Figure 1)。

Figure 1の通り、第1クラスターは、読むスピード、間の取り方、絵本の持ち方、表情、姿勢といった5観点より構成され、読み聞かせにおける読み手を媒体とする非言語的行動といったスキル内容であると考えられた。また、当該クラスターのスキルの達成度の平均得点は3.17であった。第2クラスターは、声の大きさ、声の明瞭さ、感情のこめ方といった3観点より構成され、読み聞かせにおける読み手の音声的・感情伝達といったスキル内容であると考えられた。また、当該クラスターのスキルの達成度の平均得点は3.32であった。第3クラスターは、余韻、表紙の絵の見せ方、絵の見せ方、ページのめくり方といった4観点より構成され、読み聞かせにおける基礎的な共有事項といったスキル内容であると考えられた。また、当該クラスターのスキルの達成度の平均得点は3.24であった。各スキルの評定は5段階評定でなされ、尺度水準の問題もあるため留意する必要もあるが、第1クラスターのような非言語的行動に関するスキルは、絵本の読み聞かせスキルの中でも獲得し難い内容である

可能性が考えられた。

4. 総合的考察

本授業実践では、これまで以上に絵本作成段階に同一カリキュラムで学びを展開した受講生より蓄積された資源を活用出来る仕組み、省察過程において自己評定の結果と他者評定の結果の双方を可視化出来る仕組みを設定した授業内学習を展開した。また、一連の実践により蓄積された自己省察に寄与する読み聞かせスキルの自己評定結果に基づき読み聞かせスキル 12 観点の包含関係と 3 クラスターの特徴を見出すことが出来た。当該知見に鑑みれば、単一の読み聞かせスキルを指導するのではなく、各スキルを多面的に整理していくつかの要素を概括して読み聞かせを指導する必要性もあると考えられる。

本実践における授業内学習の課題は、作成された絵本の読み聞かせを作成絵本の読み聞かせ実践時と次の回での映像視聴と 2 回授業内学習において行ったことである。この実践形態は、野中 (2019, 2020) と同様であり、各回には対面か映像媒体を介するものなのか、自分自身の読み聞かせの姿を確認できるかどうかという違いも存在する。しかし、授業内学習を担当教員と受講生との相互交流を通し、その場でしか出来ない深い学びを展開するという観点で授業内学習を捉え直した場合、授業外学習として読み聞かせの録画映像視聴と評定を行う活動を設定する方が望ましいとも考えられる。無論、授業内外を接続する方略に万能薬ともいうべき姿があるわけではない。そのため、受講生の実態、授業目的に応じた工夫を絶え間なく検討していくことが求められる。そして、保育者を目指す受講生の学びや実践力向上に寄与する授業内外を接続する授業デザインと実践の更なる展開が重要となる。

本実践報告は、保育者養成も担う高等教育機関における一つの授業に対して、絵本作成を介した授業内外の学習の接続を念頭に授業改善を行ってきた一連の内容であり、保育者志望の学生の教育内容を絵本の読み聞かせスキルの枠組みから捉えたにすぎない。今後は、個々の受講生の目指す保育者像や全体的なカリキュラムを踏まえ、授業外学習の内容や授業内外の学習の接続の支援方策の検討も必要になるだろう。このような考察が、保育者の専門性向上に注目が集まっている時期に行われたことにより、養成段階における授業改善に関する議論を次なるステージに進める一助になったと考えられる。

付記及び謝辞

本研究は、2019 年度 1 学期に開講された保育の心理学で実施された内容を本年度考察した。真剣に授業に取

り組んだ 8 名の受講生、保育の心理学を受講したこれまでの受講生に甚深の感謝の念を表す。本研究は、JSPS 科研費 19K14318 の助成を受け実施した 1 部である。

文献

- 蔣妍・溝上慎一 (2014). 学生の学習アプローチに影響を及ぼすピア・インストラクション—学生の授業外学習時間に着目して— 日本教育工学雑誌, 38, 91-100.
- 河井亨・溝上慎一 (2012). 学習を架橋するラーニング・ブリッジングについての分析—学習アプローチ, 将来と日常の接続との関連に着目して— 日本教育工学会論文誌, 36, 217-226.
- 川嶋太津夫 (2008). ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆 名古屋高等教育研究, 8, 173-191.
- 神長美津子 (2015). 専門職としての保育者 保育学研究, 53, 94-103.
- 前田麦穂・加藤靖子・坂田真啓・橋本鉦市 (2014). 専門職養成における能力形成の認識構造—6 種の専門職の養成機関長への質問紙調査から— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 54, 133-149.
- 野口隆子 (2013). 保育者の専門性とライフコース：語りの中の“保育者としての私” 発達, 134, 59-64.
- 野中陽一朗 (2017). 授業内外の学習を接続する絵本作成—保育の心理学での実践を参照しながら— 高知大学教育実践研究, 31, 169-176.
- 野中陽一朗 (2019). 授業内外の学習を接続する絵本作成 (II)—絵本作成と読み聞かせの実践を参照しながら— 高知大学学校教育研究, 1, 139-146.
- 野中陽一朗 (2020). 授業内外の学習を接続する絵本作成 (III)—絵本作成と読み聞かせに関する基礎的資料— 高知大学学校教育研究, 2, 51-58.
- 鈴木正敏 (2014). 幼児教育・保育をめぐる国際的動向—OECD の視点から見た質の向上と保育政策— 教育学研究, 81, 78-90
- 高濱裕子 (2000). 保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応 発達心理学研究, 11, 200-211.
- 吉村 香・吉岡晶子・岩上節子・田代和美 (1997). 保育者の成長における実践と省察 保育学研究, 35, 288-295.

Appendix 作成された絵本表紙（加工部分は、受講生の実名記載を倫理的視点から避けるためである）とあらすじ



主人公のなっちゃんがあやとりしていて、他に楽しい遊びがないか考えていくお話である。遊びを考えていく途中で動物達も仲間に入ってきて、なっちゃんはだんだん楽しくなっていくという特徴がある。

森に住んでいる動物たちのお食事会のお話である。動物たちが持っている食料はそれぞれ1つずつしかなく、みんなで食料を持ち合って1つの料理を作ることになり、無事に料理はできあがるのかワクワクしながら読める。

女の子が散歩をしていると、何かが落ちていたのを発見するお話である。それぞれのおとしものは、持ち主をイメージさせるヒントがあり、子どもと一緒に誰のおとしものかを考えることができ好奇心をかきたてる。

主人公ののんちゃんが、おさんぽをするなかでフルーツを見つけ、動物に取ってもらいながら、集め、最後にそのフルーツをつかってパフェを作り、みんなで食べるお話である。のんちゃんと動物のやりとりから困っている人を助ける等心あたたまるもの。

手遊びの「おべんとうばこのうた」のお話である。空のお弁当箱におにぎりやきざみしょうが、にんじんやさくらんぼのように数字にちなんだ食材が順番にやってくる。おいしそうなお弁当ができていただきますの場面で終わる。

ふたごのきょうだいのそらとうみが小学1年生になるお話である。二人は小学生になるのが不安だが、小学生になる楽しみを見つけ、不安と楽しみを何度も繰り返しつつ、段々と小学生になるのが楽しみになっていく二人の心情の変化を描いたものである。

ある森の中、たまごがひとつありそこから誕生までを描くお話である。たまごの中ではとっても元気なのにまだうまれたくない気持ちを描き、外にいるピースケにいちゃんとピーコねえちゃんが見守り、楽しさを教えてつ誕生するまでを応援するものである。

もりの仲間たちが誕生日のティディくんを驚かせようと密かに準備し、パーティーを開くお話である。また、仲間たちの「準備」は、木の実を道順に並べてパーティー会場へ案内したり、手紙であえて名乗らないことでティディくんをよりびっくりさせようとしている。